

外国語教育に応用する Readers Theatre (音読劇)

浅野享三

(南山大学短期大学部)

中学・高校と学習した「外国語としての英語（以降，EFL）」をさらに大学で継続して学生に指導する際に妨げになる要因はさまざま挙げられる。未定着な文法，語彙不足，不適切な英語音声などの要因が考えられるが，それらを補ってもなお深刻であると考えられるのが，「積極的なコミュニケーションを図ろうとする態度の育成不足」と「音声表現によるコミュニケーションの原体験不足」である。日本の EFL 学習・指導ではこの 2 点を中等教育で指導するものなのだが，日本特有な理由により不満足な状況である。本ワークショップでは，「不満足な状況」を改善する試みとして音読劇（Readers Theatre，以後 RT）を導入した大学授業の実践に基づき，参加者による RT の発表を経験する。RT の定義は複数なされるが，Flynn (2004) の定義である“a rehearsed group presentation of a script that is read aloud rather than memorized” は，日本の EFL 関係者には指導の際の心の負担が少ないと思われる。

今回は，1. 筆者提供の物語文から RT 脚本を実際に作成する，そして 2. その脚本に基づいた演出をグループごとに施して発表する，の両方を経験する。本 RT は外国語教育の枠内の，ジェスチャーなどを含む音読を中心としたもので，小道具や衣装，照明などは使用しない。当日の参加者数により進行状況は変わる恐れがあるが，概ね①RT 脚本の理論，②脚本化作業，③演出と練習，そして④発表となる。本ワークショップの対象は，日本の EFL 指導者だが，日本語授業への応用は既に群読として実践されていることから十分に可能である。また，近々導入される小学校外国語（英語）にも応用できる。時間の制約上，15 名程度を希望する。

Flynn, R. M. (2004). Curriculum-based readers theatre: Setting the stage for reading and retention. *The Reading Teacher* 58, (1), 360-365.